
ラブカクテルス その34

風雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その34

【NZコード】

N1933D

【作者名】

風雷人

【あらすじ】

今宵は年代物のカクテルをご用意いたしました。ご賞味あれ。

いらっしゃいます。
どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットファイズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティニー？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は化石ロマンスでござります。

じゅつくづじゅく。

私は大発見をしてしまった。

そこは、とあるサバンナ地域の中の一画。

少し前の話になるが、そこで井戸堀りをしていた現地民の男が、
10メーターくらい掘つたところで何か硬い物がドリルの刃先に当
たり、なんだろうとその穴を広げて探つてみたそうだ。

そして堀出されたものは見たこともない金属の破片だった。

男はそれを見てびっくりし、これは珍しい。金になるに違いないと、
町で売り捌きに来ていた。

それを私は偶然見かけて声をかけたのだつた。

男はかなりの法外な値段を付けてきたので、私はその半値でしかも、
堀出した場所を教えるならと、男の目の前に現金をちらつかせた。
男は口をへの字にして、着いて来いよと私たちに言った。

私は考古学者だ。

女ではあるが、昔から探求心が強く、周りにいる男の子を連れ回しては、森の中や洞窟、古い空き家や、お化け屋敷と言われる所まで、よく出掛けに行つた。

どんな事にも怖がらない私のあだ名は隊長。

母親はオテンバで仕方ないと嘆いたが、父は私を山登りや、川降り、スキーや水泳、それから格闘技なんかも、私がやりたいと言えばなんでも体験させてくれ、よく、お前は男と生まれ間違ったなど、笑いながら言つた。

そう言われる私はなぜか、自分で鼻が高かつた。

私が考古学に目覚めたのは15才の時。

いつものようにその頃行つていた、近くの川岸にある崖の下。そこは断層が剥き出しになつていて自然が描いた模様。

色々な色が織り重なつていて芸術的壁画。

私にとってはお気に入りの場所だつた。

でもその年の夏、この辺りにとても大きな台風がやってきた。

台風は風もさることながら雨もよく降らし、川は濁流となつて普段では想像できないくらいの水位で荒れ狂い、その崖の下を大きく削つた。

その台風が収まつてから、私はその崖下が気になつて、行ってみることにした。

川原はすっかり落ち着きを取り戻して、いつもと変わらぬ穏やかな流れになつていたが、私のお気に入りの崖は変わり果てていた。

私はその変わり様に、目が輝くのを憶えた。

台風の爪痕が残つていたその断層。そからは覗いていたもの。それは巨大な頭の化石だつた。

その化石は鋭い牙を光らせて、長い暗闇の世界から、ようやく抜け出せたと不気味な笑いを浮かべているよう見えるのだつた。

私の胸はドキドキした。

なぜだかわからなかつたが、心が高鳴る音を体中に響かせるのだった。

そして私はその化石をそつと撫でるように触つたのだった。

そして、何日もしないうちに、そこは立ち入り禁止の表示がされ、関係者以外は入れない場所となつた。

私は気に入らなかつた。私が一番初めに見つけたのに、そんな話しがあるか。

私はどうしても納得出来ないうえに、もう一度あの化石を見たくて、夜中にそこに忍び込むことにしたのだった。

その日の昼間、私は崖の上から下を見下ろし、どうやつて忍び込むかを考え、その結果川を泳いで行くのが一番良さそうなルートだと思い、月が空の天辺に来た頃に決行することにした。

夏なのに川はそれなりに冷たく、流れも思つたより早かつた。

しかしそれぐらいでめげる私ではなかつた。そして暗い川をひたすら泳いだ。

一応付けていた水中メガネとアシヒレのお陰で、かなりの速さで泳ぐことはできたが、川の冷たさは、思った以上に私から体力を奪い、息もあまり続かなくなつた。

それでも、見つからないようにと、なるべく顔を上げないようにしていたのが原因で、私としたことが、川の流れに体がからめられたようにはまり、身動きが鈍り、自分自身のコントロールが効かなくなつて、パニックを起こした。

逆らえば逆らう程、私の心は死ぬといつ恐怖の黒い色に、じわじわと支配されていった。

必死にもがき、やつとの事で水面から出た顔に命令した。

叫べつ！

た、助けてーつ！誰かーつ！た、たす、

しかし、こんな夜中に人がいるハズがない。もうダメだ。そう思つ

た、その時、
だ、大丈夫か？

声が聞こえた。

おいっ、大丈夫か、立てる深さだぞっ！足を出してみろーっ！
えつ？

私は途切れ途切れに聞こえた声に従い、足を下に向けてもがいた。
すると、あつと言つ間に川底に足が食付き、体は流れから逆らつこと
とができた。

大きく息をした途端、大人の男の人すぐ傍に来てくくれていて、腕
を引き上げてくれた。

私は助かった気持ちと、恥ずかしさに何度も顔を拭う振りをして、
荒く息を続けた。

上がった川の畔は蒸し暑く、外気が冷えた体にすぐにまとわりつい
て、皮膚はその急な感覚の温度差に着いていけずに戸惑い、麻痺し
たようになつていた。

そんな私はブルブルと震える体を止められずにいた。

男の人は、すぐ近くにあるプレハブに私を慌てて運び込み、ソファ
に横になると、タオルで体を拭いてくれ、何枚かの毛布を掛けて体
を擦つてくれた。

そのお陰で、私の麻痺した体は徐々に感覚を取り戻し、毛布の柔ら
かさを感じとれるようになつた。

私は男の人に、もう大丈夫だと言つた。

すると男は、少し待つてなさいと、カップに温かい紅茶を入れて手
渡してくれた。

私はその時初めてお礼の言葉を口にできたのだつた。

男はやつと落ち着いてきた私に、どうしてこんな夜中に川なんて泳
いでいたのかと、自分の足をタオルで拭きながら聴いてきた。

私は暑くて眠れなかつたからだと嘘を付き、男が拭いている足は、

私のせいで濡れたのだから、謝りの言葉を言わなければと、そのタイミングを考えていた。

男の人は笑って、永久に眠つちまつといひだつたよ。気をつけるよと、気さくに言つた。

そのせいで私は謝るタイミングを決定的に無くした。

そして私は、少し色々な意味で恥ずかしくなり、下に視線を落としながら紅茶をすすり、頷いた。

そして、少し落ち込んでいる私に、まだ眠れそうもないようなら、ついでといつたら変だが、いいものを見せてあげると、立ち上がつた。

そして、私の頭にポンとヘルメットを被せて笑つた。

その大き過ぎるヘルメットは私の頭から横に滑り、変な角度で止まつた。

男は、足元を気をつけると言いながら、私を案内した。

驚いたことに、そこは例の崖の下だつた。しかし、以前と様子はかなり変わり、複雑に崖が崩れないようにであろう、工事が成されて、ガラリと雰囲気も、ものものしく思えるくらいに変わつていった。私はその威圧感が少し不気味に思えて足を止めそうになつたが、それでもあれがまた見れるのだと、少しウキウキし直すのだった。工事用に設けられた囲いにある小さい扉を男は開けてくれた。

私は中にぐぐり入るなり、その光景に啞然とした。

それは余分なものがかなり取られた、あの日に見た化石のそつそつたる姿だつた。

男はそれをまるで、恋こがれた恋人を見るような目をして見上げた。そして、この化石が非常に珍しいもので、かなりの意味がある発見なのだと言つた。

凛々しくも見えるその化石を満足気に見ている私を、男の人は不思議そうに見て、あまり驚かないねと言つた。

私はその言葉を、得意気になつて、

だつてこれを最初に見つけたのは私だものと言つて跳ね返した。

しかし男の人

は、へえ～っ、そう。と、あまり驚いた様子もなく言つと、つまんなうに化石の方に視線を戻した。

私はその反応が思つたよりも冷めていたものだつたので、少しムツとした。

そして二人の沈黙を化石は牙を剥いて睨んでいた。

男の人は少しすると、奥に私を歩かせて、これはどお？と私に手招きして、歩みを急かした。

私は少しダルそうに体を動かしたのでかなり遅れてそこにたどり着くと、その先にあるものを見て、背筋がキュッと伸びるのを感じた。それは、それはなんと、何かの乗り物みたいに見えた。

硬い物でできた流線型のものだつた。

私はこれが何かと訪ねたが、男の人も首を傾げて、分からぬ。

きっと何かの乗り物だと思うが、この化石の生物が使つていたのは少し小さい。

まだ調べているところだから何とも言えないが、同じ地層からは出でこないものだと思うんだ。

男の人の目は間違ひなく輝いていた。

私は、ただ単純に化石の凄さに感激していただけだつた幼稚さに、ガツンとパンチを喰らつた想いで、心が少しヒリヒリと痛痒い感じを憶えた。

だが、目の前にある光景はそんな事をすぐに忘れさせ、私を不思議という感覚の膜で覆い包み、五感全てを使わせて、探求心というエンジンをフル回転させらがら、想像といふ別世界へのトンネルを作り、私を誘わせるのだった。

土の中から出て来たもの。それは間違ひなく私、いや私達に何かを

語っていた。

それを聞きたい。

その時に自分の人生の道がそこへと繋がっていると確信するのだった。

男の人は違う世界に行つていた私を呼び戻して、助けたお礼といつてはなんだけど、少し手伝つて欲しいことがあるといった。

私は後ろ髪引かれる想いで頷き、そこを後にした。

表に出ると、そこにはベルトコンベヤーの橋が囲いから川の間を渡してあり、そこには次々と土砂が流されていた。

その先にはいくつかの振井があり、その網の上では色々なものが飛び跳ねていた。

男の人はその中から珍しいものがあつたら拾つてほしいと言つた。ずっと機械が掘つていて、休みなく色々な物が流してくるから定期的に見ないとまずいんだと、男の人は私に説明した。

だからこんな夜中の川原にこの人がいたのかと、私は一人で納得した。そしてその網の上で忙しそうに跳ねているものを一つ手に取ると、男の人はそれが昔の生き物の骨だと言つた。

小さいその骨は、さつきの化石のものか、違う物かは解らないが、昔は生きていたのかと思うと不思議だった。

男の人は、そんな目をした私に、それあげるよ。内緒でな。と、笑つた。

私は驚きながら礼を言つたが、その時の私の目は、間違いなく輝いていたに違ひなかつた。

それからその骨は私の宝物になり、父にせがんで穴を開けてもらつて、紐を通してネックレスにした。

私ははしゃいで喜んだが母はいい顔をしなかつた。

私はそれから暇を見つければ、化石の所に行き、例の網の上を見な

がら珍しいものを拾つて、想像力を膨らませたのだった。

そして私は大学にまで行つて考古学者になつた。

未だに土に埋もれている世界を掘り起すことが私の夢になつていた。

そして世界を駆け回り、あちこちを掘つた。

今回も、町で会つたその男に連れられて行つた先を、その土地所有の政府に交渉して、特別指定区域の印をもらい、いよいよ発掘を開始したである。

そしてそこは、今まであまり前例がない地域だけに、私はワクワクしていた。

考古学の世界で掘ると言つのはそれほど楽な仕事ではない。

今回は始めに出土した深さが大体分かつていてから少しあいいが、基本的には、堀りは手作業で、少しづつ少しづつ行つ。

機械はほとんど特殊な場合意外は使えなかつた。

手に園芸用の小さいスコップとハケを手にして地道に堀進む。

それだけに何も出ない時の虚しさは計り知れず、出てきた時の喜びはこの上ないものだそして今回も長く虚しい日々が続き、気を揉む毎日が続いた。

しかし、予算も陰りが見えた頃、

出てた。

そう、遂に見つけたのだった。

私には子供がいた。

男の子だ。

実は、あれからしばらく川原の化石採掘現場に通いながら、あの男の人と仲良くなつた末、考古学者の道を進む上でも彼は、尊敬でき

る存在だったこともあって、成り行き的には条件が揃い、私達は一十歳の歳の差もお構いなく、結婚したのだった。

しかし、私も彼も世界を忙しく飛び回り、息子は母親に預けっぱなし。

彼とも一年の半分も一緒にいない生活だったが、お互いに不満はなかつた。

返つてその方が、会つた時は新鮮で愛が深まっている気がした。しかし、息子は違っていた。

やはり会えないのは淋しいし、出来れば自分の手で育てたかったが、私の探求心は母性愛より強く、息子にはいつも申し訳がなかつた。しかしその分、会つたときは必要以上に可愛がり、母親によく叱られるのだった。

息子もさすがは私達の子供だけあって、たまに帰ると、発掘や、発見の話しをよくねだり、目を輝かしてそれを聞いた。

本人は淋しいより、そこに一緒に行けないのが不満らしかつた。いつも話しの後に「ずるい」といふ。しかし私にはそれが、たまらなくかわいかつた。

今回も、久しぶりに一段落したので家に帰ると、息子が一日散に跳んで来て話をねだつてきた。

私は着替えもそっちのけで息子を膝に載せて話しをしてあげた。

ママね、また面白い物見つけたのよ。それはね、この頃あちこちで見つけられる新体の遺跡でね、それはそれは色々な物が出てきたんだけど、掘つていいくうちにそこが大きな都市だった事が分かつてきたの。

今までは何体かの新体の骨しか見つからなかつたけど、今度は町ごとよ。

息子は目を丸くして驚いた。

私は得意気に話しを続けた。

その都市にはママがいつか話した流線型の乗り物もいっぱい出てき

たし、彼らが使っていたであろう道具。その中のほとんどは、何に使われていたんだか判らない物。

あとは建物の柱の後や、それに文字の書かれた壁。そう、文字が書かれた物までが沢山出てきて、大変な騒ぎよ。

これから色々とやっていく内に、それらも読めるようになるのかも。そしたらまた、謎がいくつも解つてくるわ。

彼らが持つていた文明は私達の想像を越えている。

それがね、明らかになりつつあって、ママはもう、大忙しなのよ。息子は興奮する腕に、持つた新体のぬいぐるみをぐつと握りしめた。地層からはやっぱり、新体が絶滅する時に異常気象が起きて、全てが海に呑まれたのが解つて来ているわ。

だから新体と私達の繋がりも興味深いわね。

息子はずるいと言つた。自分も連れて行けど。

私は四本ある足の一本で息子の頭を撫でて、大きくなつたらね。とあやすのだった。

しかし、息子は四本の足をジタバタさせた。

私はそれから新体の事について色々な事を解き明かす事になった。彼らは一本の足で立ち上がる事ができ、一本の手を起用に使い、生活した。

頭脳は良かつたせいで文明は繁栄をもたらしたが、その結果、環境を壊して滅んだ。

全く大人しく想像されている姿とは裏腹に、とんでもない生き物だった事が調査結果から分かつていつたのだった。

それでも解らない事もまだまだある。

その中でもやはり未だに最大の謎は、あの川原の化石だった。

それは私の旦那が名付け親になつた、恐竜。それと、その時に出土した新体との関係だった。

そう、あの牙を剥き出した巨大な竜。

あれは年代判定の結果、恐ろしく古い物だと分かつたが、なぜ新体の化石と一緒に出土したのか？

あれからの発掘結果で、恐竜の化石の下から新体の子供と見られる化石も見つかった。

もしかしたら恐竜は凄く長生きする生き物で、新体を餌にしていたのか、はたまた餌にされていたのか、それとも仲良く共存していたのか？

難しい謎ではあるが、想像が想像を呼び、世界は広がる。

そして、そんな想いをはせるその時、私は果てしない時空へと飛び立つことができるのだ。

これだから考古学はやめられない。

僕は今日、パパの新しく買ったカツコイイ車で博物館に来た。

僕が前から恐竜を見たいって言つてたから、パパがドライブがてらにと、連れて来てくれたんだ。

やっぱりティラノサウルスは凄いねー。

僕とパパが化石を見上げて、その迫力に圧倒されないと、ガタガタガタと大きな振動が、

じ、地震だーっ！

誰かが叫ぶのが聞こえた。

僕はあまりの揺れに転んでしまった。すると、上から恐竜の、ティラノサウルスの化石が倒れてくるのが目に入ったのだった。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのいじ来店、心よりお待ち申しあげております。では。
つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1933d/>

ラブカクテルス その34

2011年1月28日10時18分発行